

第6章 太平洋の果て ～イースター島～

この旅行の後、私はまだ見ぬ南米への想いを強くする。

6.1 南へ、そして東へ { 南太平洋 }

6.1.1 シンガポール航空 1998年7月18日(土)

朝早く起きた。いつもは起きないくせに、こういう時は早起きになる。7時ごろ朝飯を食った後、荷物をリュックに詰め込み、8時ごろ寮を出た。駅へ行くと特急は9:04までなく、30分程あったので会社に寄った。亮と小林の新住所を控えるのを忘れていたのでちょうど良かった。旅先から葉書を出すのに必要だ。Lotus Notesの個人アドレス帳に入れてあったものをメモした。土曜日であったが、研究室には柳さんが来ていた。30分程後、再びリュックを背負い、黒崎駅からソニックに乗って福岡へ向かった。

空港は賑やかだ。今日は高校生や子供連れがたくさんいる。どうやら高校生は修学旅行でグアムやシンガポールに行くらしい。その他にも団体が多い。みんな夏休みなのだろう。チケットを受け取り、チェックインを済ませ、売店でシャンプーやメモ帳を買い込んでから早めに出国手続きを済ませた。ロビーでこれを書いていると、高校生の団体が周りにどーっと来た。私服だが「先生～。」とか言ってるから高校生だとわかる。どうやらグアムに行くようだ。今グアムは日本の団体旅行客だらけなんだろうなあ。さて、初めてのシンガポール航空(SQ)。ランキングでいつも1位になる噂の航空会社だ。前から一度乗ってみたかった。楽しみだ。なんかこのロビー、どんどん人が増えてる。こんなに混んでは初めてだ。でも思ったほどうるさくはないな。なかなかマナーいいぞ、高校生。わかまえてるな。

搭乗口を入ったときの匂いは、これまでの旅行を思い出させる。福岡空港に慣れてしまったせいか、今回は空港に来てワクワクすることがなかった。日常の一部になってしまっていた。でも飛行機へ続くあの匂いは「外国へ行く」という何とも言えない高揚感と、旅で出会った懐かしい人々との記憶を甦らせてくれる。

飛行機に乗り込んだ。すごい! 聞いてはいたが、各座席に液晶パネルが付いているのは実際に見るとやはり感激する。シートはとても綺麗だ。スチュワーデスの制服もみんな似合っている。きれいだ。素晴らしい。搭乗券を見られて、座席まで丁寧に連れて行ってくれる。うれしい。シンガポール航空よ、もう既に浮かれ気分が止まらないぞ。でも高校生

とおばちゃん団体の笑い声がなんかちょっと…。これのビジネス、ファースト（ラッフルズ）クラスってすごそうだな。機体はBOEING777。加速のときは自然に顔がニコニコする。どうしようもなく楽しい。旅の始まりだ！

発見。またすごい。肘置きのところにあるボタンがいろいろ付いた操作パネル、取り外せるぞ。ゲームコントローラみたいだ。説明読んだら、実際ゲームもできるじゃないか！本当にゲームコントローラだった。映画のチャンネルもいっぱいある。いやー、あきさせないねえ。機内食もうまい！ただ座席が狭いのはエコノミーだからしょうがないのか。狭さだけは他と同じだ。でもまた乗りたいと思わせる要素が十分あるぞ。飛行機の中では眠ろうと思っていたのだが、眠ってる場合じゃない。面白がっているいろいろいじくった。

もうすぐシンガポールに着く。5時間半乗っていた。時差があるから現地時刻は16:30になるそう。予定より30分早い到着だが、ケツが痛い。チャンギ空港は以前来た時とずいぶん印象が違う。まるで一大ショッピングセンターだ。こんなだったっけ？時間があったのでスカイトレインなるもので第1ターミナルへも行ってみた。3年半前に夜を明かしたのはこっちの方だったようだ。管制塔の位置でわかった。でもやっぱり、以前ここに来た感じがしない。本当にこんなだったかなあ。空港をひととおりうろろした。なんかあんまり外国にいる気がしないなあ。

自分にとって外国とは、やはりあのアジアの喧騒だろうか。今いるここは東南アジアには違いないが、たくさんの日本の高校生が学校帰りの雰囲気そのままの格好でうろろしている。シンガポールの繁華街も日本人だらけなんだろうなあ。空港内のレストランでは懐かしい、麺のスープの匂いがした。時間がないせいもあるが、もしあっても空港から出てどこか観光しようという気は起こらない。ただ、屋台の飯には今でも誘われるので行きたい。前に来たとき、

「観光は一度見ればもういいけど、そこでしか食べられないおいしいものがあるとまた来なくなるよなあ。」

と友人たちに言った覚えがある。今もそれと同じ思いだ。

外国の空港へ来ても、飛行機を降りたとたんにガラッと何か変わるといふあの感じは、今の自分にはもうない。ここシンガポールのようにきれいな大空港だと特にそう。ただ、この空港は香港やバンコクより大人の落ち着いた感じがあるけど。

AUCKLAND行きは再びシンガポール航空。機体はBOEING747-400だ。やはりこれにも制服姿の日本人高校生が乗っている。制服で外国に来るってのは管理する先生側には好都合だろうけど、生徒はいやだろうなあ。はっきり言って変だぞ。飛行機は約15分遅れで20:57にターミナルを離れた。今度は前の席だ。前に座席がないから足のスペースが広いぞ。ラッキー！

6.1.2 寒い南国 1998年7月19日(日)

足伸ばして寝たい。きつー。シンガポールとの時差は4時間。所要時間約9時間で到着。今腕時計の表示は5:58。4時間進めて9:58になった。空港のSQのオフィスでリコンファームできた。帰りの分のAUCKLAND-SINGAPOREとSINGAPORE-FUKUOKA

の両方とも。なんだ、簡単じゃないか。前からこうすりゃ良かった。

ニュージーランド。うひょー、ここは寒いぞ。みんな冬の格好をしている。私だけ素肌にシャツ一枚…変だ。シャツの下にTシャツ着た方がいいな。両替すると、US\$60がNZ\$105.xxになった。なんだ、両替すんのUS\$40ぐらいにしときゃ良かったな。多すぎたかも。空港を出て真ん前にAirBus(空港バス)が止まっていた。太っちょの黒人のおじさんが

「どこ行くんだ？」

と声をかけてくれた。市の中心まで片道\$10、往復だと\$16だそう。もちろん往復で買い、バスに乗りこんだ。バスは20分ごとに出ているそうである。20を「トゥエニイ」と言う癖がついてしまっている。ここじゃ「トゥエンティ」。オークランドの空港はあまり大きくない。人も多くない。ここってニュージーランドの中でも大きい都市のはずだよな…。

途中、牛がたくさんいた。50頭ぐらいかな。牛はインドで見たのとは随分ちがう。日本でおなじみの白黒模様だ。牧草地がとても広く、のどかだ。チーズやヨーグルトの商業シャルみたいな風景が続いている。でも空港から市中心部までちょっと遠いのが難点だ。成田ほどじゃないけど。天気は曇り。まあシンガポールから出発した時の情報では雨って言ってたから、それよりはまし。バスは40分ほどでダウンタウンエアターミナルに着いた。数時間後にまたここへ戻ってこなければならぬ。

まず昼飯。インドネシア、タイ、すし屋、中華、インド、韓国、…各国の料理人が一つの店に入っている屋台村のような店がある。これはうれしい。何度も足を運びたくなる店だ。全部食べてみたい。こんなの日本にあつたらいいなあ。タイの麺を食べた。ん？あまりスパシーじゃないな。まずくはないんだけどちょっともの足りない。別のを注文すりゃ良かった。

巨泉のOKギフトショップ、ホットドッグ売りの兄ちゃん、ストリートミュージシャン…。でもなんか賑やかさが無い。静かで活気がない。人が少ないのだ。なんで？人口少ないのかな。それとも冬はみんな外に出ないのか？あ、日曜日だからかも。街にはタイレストランと韓国レストランが結構ある。Japaneseレストランも。この静けさがニュージーランドなのだろうか。ジョギング、マウンテンバイク、フリスビー、そしてラグビー。うーん、ようやくちょっとだけニュージーランドっぽいぞ。でも都会はみな同じだ。今や日本でも白人が英語で会話しながら歩いていたり、英語の看板だらけの通りなど珍しくなくなった。つまりオークランドの街中を歩いていてもあまり外国にいる気がしないのである。

学生のときに行ったオーストラリアでは、クイーンズモールをただ歩いているのがとても楽しかった。おそらく今、あのクイーンズモールへ行ったとしても何も面白く感じないだろう。ちょっと寂しい。街を見ながら歩いて博物館へ行き、その後すぐ戻ってきた。なかなか見応えのある、いい博物館だった。今日はずっと曇りだった。もし快晴だったらこの印象は違っていただかもしれない。14:20、空港へ戻るため再びAirBusに乗った。

チェックイン手続きが遅い。もっとサッサカやらんかい。でもなんかこの人たちは憎めない。愛想が良いのだ。どこぞの国みたいに無表情で黙々と処理されるのとは違って気分がいい。やはり空港はその国の玄関口だから。笑顔とちょっとした会話、大事ですよ。

17:15ごろ出発。搭乗は一変でなくて、番号の大きい(後ろの席の)人から呼ばれて乗り

込むようにしている。私は08Eなので最終だった。このやり方って本当に効率いいのか？

BOEING767/300。その便はラロトンガ、パペーテ経由のロス行きである。スチュワーデスだけでなく、男のスタッフが多い。でもなんか抜けてる。気配りが行き届いていない感じだ。あんたらそれでもプロか？何かのついでにサーブしてるみたいだ。ヘッドセットはまばらに配るし、私の隣の女性がヘッドセット持ってきてと頼んでも忘れてるし、私にはスナック配ったのに彼女の方に飲物をサーブした男性スタッフはスナック配らないし、スチュワーデスは私にアップルジュースくれないで行っちゃうし…。なんでみんなそんなに抜けてるんだ！エコノミーだからか？それともニュージーランド人の大らかさか？シンガポール航空の後なだけに、とてもいい加減に扱われてる感じがする。

NZ時20:51、クック諸島のラロトンガ着。現地時は18日22:51。日付は昨日に戻った。どうやらここで一度降りなければいけないらしい。機内で左隣りに座っていた彼女が最後にキャンディをくれた。ヘッドセットを貸したお礼だろう。その前に夕飯のデザートに出たケーキを勧めてくれたが、甘ったるいから断っていたのだ。降りるとき、立ち上がった彼女を見たらスタイルが良くてモデルみたいだった。髪はおろした方がいいよ。その方が美人に見える。美人なんだけど、きつい感じの顔なんでちょっと俺好みじゃないんだよねえ。でもやっぱりかっこいいなあ。

こんなところに寄るといのは予期しない出来事だったが、ラロトンガ島の空港に降り立った。外は真っ暗だ。小さな空港。中ではウクレレとギターの間ぐらいの楽器を演奏しながら、スタンドマイクで唄ってるおじさんがいる。南の島へ来たという感じだ。もうニュージーランドの寒さはここには無い。でも夜だからこれで涼しい方なのだろう。飛行機の準備が整うまでここで待機だ。彼女は到着手続きを済ませて、行ってしまった。

おっちゃんの演奏は続く。待っている客へのサービスなのだろう。待っているのは100人ぐらい。我々以外に客はいない。飛行機も我々が乗って来たものしかないようだ。夜遅いけど、パペーテに着いてから宿とれるかなあ。ちょっとアジアと勝手が違うから心配だ。

暗いので周りの景色は全然わからない。出発ロビーと飛行機しか見えない。乗り込む時(NZ時21:35)遠くに目をやったが何も見えなかった。NZ時19日22:00(現地時19日00:00)ラロトンガ発。

機内で配られたタヒチの出入国カード、書いている途中で気がついたのだがフランス語、英語、そして何と日本語で書かれている。日本人相当多いんだな。しかもアンケートの入国目的のところに「観光」と別に「新婚旅行」というチェック欄があるぞ。

6.1.3 フレンチポリネシア 1998年7月19日(日)Part2

現地時01:35、タヒチのFAAA空港に到着。日本を出てから何日、何時間経ったのかももう訳わからん。タラップを降りて空港入口へ向かうと、四人の楽団と小さな花の手渡しでのお出迎いだ。おおー南国。イミグレの処理が遅くて行列になった。楽団が配慮してか、中に入ってきてから再び演奏を続けてくれた。とてもいい。一曲終るたびごとに並んでいるみんなから拍手が起こる。

2時ちょっと過ぎにようやくゲートを出られた。誰かの出迎えに来ている人たちの笑顔

が見える。私はまず、オークランドの時と同じようにとっとりコンファームを済ませとこうと思い、チェックインカウンタと航空会社のオフィスを探して歩いた。ないな。実はFAAA 空港の図だと思って開いていたガイドブックのページはラロトンガ空港のものだった。とりあえずまず両替をしておいた。2万円。その後空港をうろうろしたがみんな閉まっている。インフォメーションも閉まっている。2:30 ごろ、さっき利用した銀行も閉まった。もうこの時間じゃ宿探しもできないだろう。空港で寝るか。覚悟はしていたが、かたいベンチしかないぞ …。

日本時間で考えると2日間風呂に入っていない。飯はオークランドの昼以外は全て機内食だった。足を伸ばしてぐっすり眠りたいが、あさってまでお預けだ。イースター島への出発便は明日の今ごろだ。夜中の2:10 発なんていうの、よく設定するねえ。なんでそんな時間に運航すんのかよくわからん。

軽食がとれるカフェは開いている。コカコーラを買って飲んだ。支払いの時はまごついてしまった。値段を言われてもまだ全然ピンとこないの、コインをサッと出せない。持っているコインを全部渡しておつりをもらった。その後、出発待合室(「室」といっても部屋じゃなくてロビー)に行くと…なんだ、ベンチで寝てる人結構いるじゃん。でもなんでみんなあんなに荷物多いんだろう。カートを使ってない人はいないじゃないか。バックパッカーいないなあ。現在3:16。寝よ。

おいおい、君たちよくこんなところで眠れるね。ベンチは日本でよく地下鉄のホームにあるような、一人ずつのものがいくつか連なっているタイプである。真っ直ぐな長椅子じゃないからどこに体ずらしても落ち着くところがないぞ。お尻がはまれば背中が盛り上がりのとこに当たって痛いし、背中をいいところにする尻が落ち着かない。あ、昔買った携帯用枕、いつも旅行に持って行くけど初めて役に立ったぞ。これ、床に寝た方がましかも…。夜中、ベンチから床に落ちて一人で笑った。

朝になり、空港で荷物を預けトイレで顔を洗い、髭を剃って歯を磨いて、7時半ごろパペーテへ出かけた。道へ出てル・トラックに乗ろうと思っていたが見あたらなかったので歩くことにした。パペーテまで1時間ぐらいかかったが、歩いている間、天気は曇りだったので辛くはなかった。

やはり外国にいる感じがしない。今日は日曜日だ。日曜日はほとんどの店が閉まる。カフェが数軒と、McDonald's と KFC は開いていた。しばらくすると強烈な日差しがやってきた。おー、ようやく南国へ来たって感じだぜ。

カフェでコーヒーを飲んだ後街をぶらぶらしていると、しばらくして無性にトイレに行きたくなった。でもどこも鍵がかかっている。うおー。ショッピングセンターのトイレも公園のトイレもだ。鍵を開けてもらおうにも街中の店はほとんど閉まっている。ピンチ！さあ、どうする？最後の頼みの綱はMcDonald's だ。早歩きでMcDonald's を目指し、駆け込んだ。あーありがたや。助かった。トイレ使うだけで出るのは申し訳けないので注文したら、日本語メニューがあった。英語も通じた。ここへ来てしゃべったフランス語は今のところ

「Bonjour.」

だけである。そこでひと息ついてから、パペーテから PAPEETE-FAAA-OUTUMAOAO

の表示のル・トラックに乗って行けるところまで行った。ル・トラックは島全体を一周している訳ではないのだ。降りたところには大きなスーパーマーケットがあったので入ってみたが、特にいるものはなかったのですぐ出て来た。その後は歩き。途中、海と山の景色が素晴らしい。でも車道なんて排気ガスをモロに浴びるし交通量も少なくないから、「樂園」ってイメージとはかけ離れてるんだよなあ。休み休み歩いたが、なかなか博物館に着かない。

1時間30分ぐらい歩き通してやっと博物館の看板があり、そこから曲がってしばらく住宅地を歩き、ようやく博物館に着いた。疲れたぞー。客は家族連れが2組ほど来ているだけで空いていた。

博物館の中は「ポリネシア」というまとまりを意識した展示で、なかなか面白かった。また、ティキ像が何体が展示してあり、イースター島のモアイを見る前座として気分は盛り上がった。これモアイみたいなもんじゃないか。同じポリネシアの文化としてつながりがあるなあという感じだ。そして、昔の島民の姿を描いた全身入れ墨の宇宙人のような絵がとても気に入ったので、それがプリントされたTシャツを買ってしまった。サイズ40ってあったけど、40って何だ？

博物館を出ると、横で槍投げの競技会が開かれていた。高いポールの上に付けてあるココナッツが的だ。それをめがけて出場者みんなで槍を投げている。競技者が着ているのはパレオのみで、頭に草のかざり輪をつけている。観光客向けかな。博物館の横でやってるからそうかもしれない。でも快晴の空と背景の山と雲、後ろの海から聞こえる波しぶきの音がとてもいい。後ろを見るとモーレア島が見え、海がキラキラと輝いている。どこを見ても絵になる景色だ。お、結構、的に当たってる。うまいもんだな。ここに来てから、意外にもまだ日本人を見かけていない。タヒチは日本人の新婚旅行だらけというイメージがあったが、そうでもなかった。と言っても私は島の一部しか見ていないのだが。

博物館前に停車していたル・トラックは16時頃まで出ないそうだ。運転手のおっちゃんも参加選手らしい。もう歩くのはいやだからここでのんびり観戦しよう。他の場所を見るのはイースター島から帰ってきてからにする。しばし競技会観戦。この人たちには腕や背中に入れ墨をしている人が多い。競技者の中にも結構いる。伝統なんだね。

競技会が終ると、観客が槍を投げさせてもらっていた。歩いて帰ろうと思立ち、気合いを入れて歩き始めた。空港まで歩くとするとル・トラックがない分、来た時より長い距離になる。30分ぐらい歩いたところで後ろからププーという音。博物館で声をかけたル・トラックの夫婦だ。このル・トラックは空港までは行かない。

「Maeva?」

と聞かれた。来たときに PAPEETE から Maeva まで乗ったのだ。乗せてもらうことにした。しかし記憶はいい加減だ。降ろされたところは見覚えがない。ここだと言われて降り、お金を渡し、

「Voilà。」

「Merci。」

のやりとりの後、ル・トラックは去った。見覚えがないので来た道を少し戻ったら、あの大きなスーパーマーケットがあった。あれはさすがに忘れない。でもこんなとこだったっ

け？戻ったりして無駄なことをしてしまった。また同じ道を引き返した。すると道路の向こう側にあるFAAAの標識と、こっち側にあるPAPEETEの標識が反対方向を差している。なんだこれは。どっちも同じ方向にあるはずだろ？とまどった。

FAAAの方へ行くと、結局途中からFAAAとPAPEETEと同じ標識になった。あーややこしい。しかし登り坂はきつい。しばらく行くとまた後ろからププーという音がして、今度は大きめのル・トラックが止まった。エアポート方面へ行くかと聞いたら行くと言うので乗った。私の後に中年の白人女性も乗ってきた。あれ？もしかしてこれ、この人が止めたのかな。まあいいや。丁度良かった。そして17:00ごろようやく空港へ帰ってきた。疲れたあー。

空港内でAir NewZealandのオフィスを見つけたので、SQのときのようにリコンファームしようと思って入った。兄ちゃんが一人居るだけだ。リコンファームはここでできると聞いたら、Air NewZealandはリコンファームする必要はないそうだ。なーんだ。教えとけよ、アクロス(今回チケットを買った旅行会社)。とりあえずパペーテからの帰りの分はこれで全てOKだ。後はイースター島の往復だけ。もう3日(だと思う。もう正確にわからなくてどうでもよくなってる)だったが、この旅のメインはこれからだ。

Air NewZealandのオフィスを出てからは、すぐに空港のカフェへ行ってHINANO Beerを頼んだ。タヒチのビールである。久しぶりのビールだ。330mlの瓶。グラスに一杯つぎ、一気に飲んだ。うめー！…ん？瓶を見ると

MEDAILLE D'OR LUXENBOURG 1990

とあってMONDE SELECTIONのマークが入っている。源氏パイやギンビスのアスパラガスビスケット、UCC缶コーヒーなどでおなじみのモンドセレクション金賞受賞ってやつだ。へえー。ビールについてんのかって初めて見たな。急に格調高い飲み物に思えた。改まって残りをグラスについで飲んだ。

現在17:52。空港に預けた荷物の受取りは23:00。出発は2:10だ。まだまだ時間がある。またあの硬いデコボコベンチで寝よっかねえ。昨日一回落ちて恥ずかしかった。めちゃめちゃ寒かった。背中痛かった。絶対体に良くない。ビール飲んだから寝過ごさないようにしなきゃ。

6.2 モアイと鳥人の島 { ラパヌイ }

6.2.1 絶海の孤島 1998年7月20日(月)

ランチリ航空のチェックインが済むまで長かった。今日(正確には昨日)は歩き疲れていたもので、行列に並んで立って待っているのはとても辛かった。Departure Gateでは学生っぽい人たちが友達を見送る歌を歌っている。ギターの伴奏付きの大合唱だ(6人ぐらいだけど)。『蛍の光』も唄っていた。最後は女性の唄で、そのまま唄の流れのままで\Bye Bye"というセリフで締めくくられた。素晴らしい。

そしてその他にも1人の男の人を見送りに友達が集まったという感じの一団がいて、無理矢理頭に花輪をかけたたりしている。抱き合っただけのキスをしたり、なんだかうらやましい。さっきの人たちをパロって蛍の光を唄って笑ったりしている。姿が見えなくなるところに行くまで大きな声で言葉をかけ、手を振って見送っている。いいなあ。なんだか自分も一緒に見送られている気がしてとても良かった。あたたかい。

出国手続きが終った。眠い。また、このソファが寝るのに最適だ。無性に眠い。ずっと寝不足の状態だったからなんだか夢心地だ。ここってタヒチなんだよな～。なんかポヤ～ンとしていて現実じゃないみたいだ。

アナウンスで呼び出された。SEKIYAMAってフランス語風に呼ばれた。面白い。フランス語風の発音だけど英語だ。20番ゲートに来て下さいって。行ったらチェックインのときのランチリ航空の兄ちゃんがいる、これに替えてくれと言われて新しいボーディングパスをくれた。なんかFamilyがいるから席を替えたのだそうだ。

乗客はみんな背が高い。私が小人になった気分だ。それに美男美女が多いな。女性は足が長くてスタイルのいい人が目立つ。ランチリ航空の飛行機に乗り込むと、フォルクローレが流れている。うーん、いいぞランチリ。SISAY¹が演奏しているはずはないが、彼らの演奏を思い出して気分を盛り上げられる。いいねえー。機内アナウンスはスペイン語、英語、フランス語だ。

約5時間後、私の腕時計時刻で7:16(現地時11:15)、着いた。ようやく着いた。着陸前、窓から見て結構家があるなーと思った。長い道のりだったが、とうとうやって来たぞ！期待に胸が膨らむ。飛行機から出てタラップを降りると、そこには謎の像が2、3ある。おー、いいぞいいぞ。なんだかわからんが、わくわくする。手続きが済むと空港内は、え？というほど何もなし。全然「空港」って感じでもない。

窓口におばさんが二人いるところがあったので、ホテルのインフォメーションだと思って左側のおばさんのところに行った。しかし総合案内ではなく、その人はいきなり宿のおかみさんだった。ウインドウのところにいる男の人との違いは何だ？なんであの人は中に入れないんだろう。おばさんが出している案内は日本語でも書かれている。素泊まりUS\$20、朝食付き\$25だそうだ。妥当なところだろうと思い、すぐその宿に決めた。ランチリのリコンファームと両替をしたいんだけど…。おばさんに言うと後で大丈夫と言われた。そしてオーストラリア人カップルとともに車に乗り込み、宿へ向かった…と思っただけで着いた。外側は

「え、これで\$20？」

と思ってしまう感じだ。\$20ってベトナムでは結構外見は綺麗な宿だったからなあ。《この物価は高いぞ》と直感した。建物は1階建て。部屋にベッドが4つある部屋と2つある部屋が提供されて、オーストラリアンの彼らに

「どっちがいい？」

¹シサイ。日本の街角で演奏している南米エクアドル出身のグループ。私が最初に見たのは中央林間(神奈川県大和市)に住んでいた学生るとき、近くのスーパーの前での演奏だった。その後、北九州に住んでから小倉や黒崎でも彼らの演奏に出会った。近くの小学校に招かれたときの様子がローカルニュースで取り上げられたりもしていた。彼らの演奏により、私の南米への想いはさらに強くなったものだ。

と聞かれた。私はベッド4つの方はドミトリーだと思ったので、おばちゃんに安いのかと聞いたが値段は同じだそうだ。うーんと考えてる間に彼らがベッド2つの方に決めてしまった。部屋は悪くない。ホットシャワー、トイレつきでベッドも部屋も清潔だ。キーホルダーもモアイでうれしい。

食堂があって、日本語の本もいくつかあった。えらく古い本だが面白い。日本人はイースター島のお得意様らしい。宿帳に記入し、コーヒー(インスタント)を飲みながらしばらくくつろいでいると、ある白人男性が来た。おばちゃんが相部屋いいかと言うので、ベッド4つもあるし、どうせはじめドミトリーだと思ったから OK した。旅は道連れ世は情け… 楽しくなりそうじゃないですか。彼の名はディディエ。\"DDA\" と略記するとわかりやすいと教えてくれた。上着にカナダの国旗が入っていたので

「カナダ人？」

と聞いたら(俺も単純な質問するなあ)、カナディアン&フレンチだそうだ。今はタヒチに住んでいて、語学と歴史の Teacher だそう。メル・ギブソンに似ている。明日車を借りるけど、何人かで share した方が安いから一緒にどうだと誘われた。即 OK だ。私は国際免許をとってこなかったのが運転は彼におまかせであるが、快諾してくれた。彼はとても疲れているので今日は寝るという。私はさっそくこの辺りを見ようと思い、村へくり出した。

初めに海へ向かって歩いた。青々とした海が見え、途中からは土の道になった。うろろろしながら「島」を実感した。海岸線は荒削りで、景色がとてもいい。静かだ。再び舗装された道へ出てしばらく行くと、初のモアイとご対面！おー、会いたかったぞ！海を背にして立っている1体のモアイ。これがモアイか。しばらく眺め入ってしまう。いやー、日本を離れてはるばる遠くまでやってきたんだなあと感じる。その辺りは漁村の雰囲気を感じ出していた。キリスト像が海に向かって立っていた。そこで雨がちょっと降ったので、ちょっと雨やどりをしてから体育館、学校、教会などを見てまわった。今はキリスト教世界なんだな。途中、同じ宿のオーストラリア人の2人とも会った。なんだ、ここは日本で思ってたよりちゃんとした街だぞ。日本人が持つてるイースター島に対するイメージは間違ってるなあ。

その後教会の横の道をずーっと行き、空港の端へ出ようと思って歩いたら、これがとんでもなく長い道のりだった。でも途中、馬に乗った小さな男の子に

「¡Hola!»

と挨拶されたりした。いやーうれしいねえ。だが無意識のうちに

「Hello.」

と答えてしまった。スペイン語がスッと出てこない。それから木の柵に囲まれた庭でサッカーをしている子供たちや(サッカーはやはり大人気らしい)、馬が草食ってるのを見たりした。

空港の管制塔が見え始めた辺りで霧が前からやってきて雨になり、すぐ止むだろうと思ってたらかなり降ってきた。やべーと思ったときにはもう遅い。雨宿りできるようなところはどこにもない。背の低い草が生えているだけ。持ってた荷物を頭の上に乗せて走った。びしょびしょになったところで止んだ。あーあ、と思ってたら日が照ってきて、歩いてい

るうちに乾いてしまった。なんか便利だな。雨は気にすることないや。

また、空港沿いの道でもすれ違うときに男の人に挨拶された。空港は閉まってすっかり活動を停止していた。どうやら飛行機が来るときだけ活動するらしい。ドアは閉められ、電灯も消えて真っ暗だった。両替してないんだけど、どうしよう。村を一周して宿に戻ると、おばちゃんが食堂から顔を出した。

「オロンゴ行ったの？」

「いや、この周りを散歩しただけ。」

MONEY EXCHANGE がないんだけどと聞くと、T/CでOKだそう。店で買物するときもT/Cでいいらしい。でもその時間、店は軒並み閉まっていた。シエスタらしい。

宿へ帰ったのは15:30ごろ。疲れたので眠たかったが、その前によくシャワーを浴びて着替えた。おー気持ちいいぞ。体洗うの3日ぶりじゃないか。その後は朝までお休み。あ、昼飯食ってないな。まあいいや。

DDAはいびきをかいていた。

6.2.2 ラノ・ララク 1998年7月21日(火)

今日は8:00ごろ起きた。DDAが

「おはよーございます。」(日本語)

昨日は8:30出発と約束していたが、DDAが朝からシャワーを浴びたり身じたくをしたりしたのでその後の出発となった。朝食はオレンジジュースと平べったいパン2個、ビスケット3枚、オレンジジャム、バター、インスタントコーヒーだ。なんか変なの。メインは何なんだ？でも何も食ってなかったからうまかった。

10時ごろ2人で宿の車を借りて(1人\$30)出発した。あれ？このシートベルト、ちゃんととまんない。はずれちゃうじゃないか。島の中心を通る道を北へ向かい、着いたのはOVAHEビーチ。途中まで道は舗装道路だったが、ビーチ近くから土のデコボコ道になった。分岐のところではどっちに行ったらいいのか良くわからなかった。適当に進んだらOVAHEビーチに着いたのだ。ビーチは小さかったが綺麗で、丘に登って見た景色もとても良かった。風が強くてちょっと肌寒い。でもモアイはない。

再び車に乗り込み、アナケナへ行くと5体のモアイの姿があった。いいぞー。そこではフランス語ガイド率いる10人ぐらいのツアー客が説明を受けていた。近くの石に座ったらそこに座らないでと言われた。この石もモアイ？ツアー客が移動してからDDAと一緒にモアイへ近付いた(ガイドのおばちゃん20分ぐらい喋ってた)。DDAはフランス語がわかるので、聞いていたことを英語で説明してくれた。それを聞きながら2人でモアイの横へ登ろうとしたらおばちゃんにまた怒られた。登っちゃいけないらしい。頭にプカオという赤い石の帽子をのせたモアイが綺麗なビーチを背にして立っている。海もとても綺麗だ。感激だ。近くにはホツマツアのモアイというのもあった。そのモアイの前には銅板で

KON TIKI

と書いてあった。コンチキ号と何か関係があるのか、スペイン語だからわからん。写真撮ったから帰ってから解説しよっと。

その後は島で一番高い山の方へ進んだ。その辺に生えているのはガムツリーという木だとDDAが教えてくれた。匂いがわかるかと聞かれたがよくわからなかった。ポリネシア特有の木らしい。途中何度か車が登れないところがあった。道じゃなくてタイヤの後があるだけのところが続く。大きな水溜りがあったりもする。そこをひどい車で悪戦苦闘しながら進んだ。坂になっているところではすべるので、思いっきり勢いをつけて登ったりした。DDAはハンドルをグルグルグルグルグルグル回す。ひどい悪路で運転がとて難しそう。スピンして景色がぐるーっと回ったり、でこぼこ道で派手に上下にガタガタと揺れるのが結構楽しい。久米明の声で

「取材班は…」

とナレーションを入れたくなる。しかし景色がとて素晴らしいぞ！DDAはイギリスにある景色に似ていると言う。行ったことないけどそんな感じするなあ。特にハンガロア方面を一望できるところはすごかった。村が遠くに見えて、島の輪郭を半分以上見渡せる。大パノラマだ。こんなとこの情報はなかったなあ。

これ以上もう車で行けないので、それから元の道まで戻り、アフ・アキビへ向かった。海を見つめる7体のモアイだ。ホツマツアが入植前に送り込んだ7人の使者を表していると言われている。島にあるモアイで海の方を向いているのはここだけだ。いやー、これもいいぞ。モアイって何か哲学的な姿してるよなあ。そこでは2人の人に出会った。日系アメリカ人のリンダさんと日本人のトオルさん。リンダさんはカリフォルニアから来たそう。トオルさんはアメリカで勉強して、卒業したのでその後南米周遊チケットを使って南米からここへ来たそうである。いいなあ、南米。でもペルーには行ってないらしい。DDAと私は彼ら2人を車に誘い、長期滞在していて島に詳しい彼女にその後ガイドしてもらうことになった。

まずアフ・アキビ近くの洞窟へ行った。へー、こんなところ教えてもらわなきゃ見逃しちゃうなあ。中へ入った。普通は危険だからガイドは行かせないらしい。彼女は行って見たかったのだろう、先頭に立ってどんどん奥へ入って行く。彼女、用意がいいねー。懐中電灯持って来てる。私も後に続いた。DDAは途中で待ってることにして、着いてこなかった。

「川口いー浩わぁー」

と嘉門達夫の歌が頭の中で繰り返される。Adventureだ！着いていかないと、暗くて足もとが見えないので必死になって着いていった。途中、上に穴が開いているところがいくつかあったが、上は覗けなかった。どんどん奥へ行くと、とうとう行き止まり。そこで開いている穴には登れそうだった。石が積んである。この洞窟は全部自然にできたものと言う。人が掘ったものではないそう。まずトオルさんが石に足をかけ、狭い穴から上へ上がってみた。上がった。その後続いて登ると草っ原の上だった。こんなとこに穴開いてるのってなんか面白いな。地上を歩いて車を止めたところへ戻った。そう、DDAはまだ中だ。彼は入口から出て来た。

車のガソリンの残りがEmptyに近い。一度補給しにハンガロアへ戻らねば、ということで引き返すことになった。途中、倒れているモアイがたくさん見えた。島のモアイは一

度全部倒されたそうだ。現代人が立て直したもののだけが、現在立っているのである。ガソリンを満タンにしてからはラノ・ララクへ向かった。まずトンガ・リキ。日本企業のタダノがクレーン持って来て立て直したという15体のモアイ。でかい！今までのと違う。なんだこの存在感は。絵になるバックの景色も素晴らしい。それから昔、大阪万博のときに日本に来たというモアイがそばにぽつんとあった。よくこんなもん運んだね。胴体には、運んだときについたという鎖の後があった。相当重いんだな、これ。近くから遠くから、ここトンガリキの写真を撮りまくってしまった。バックのポイケの切り立った崖もとてもいい。君たち、いいところに立ってるねえ。

その後モアイの石切場、ラノ・ララクへ。この山も印象的な形と色をしている。近付くととてもシュールな世界が広がっていた。トンガリキから見たラノ・ララクも印象的だったが、反対側ではモアイがごろごろしてる。半分土に埋まっていたり、傾いてたり、大きいものから小さいのまでキノコのように山肌に生えてる。また岩からの切り出し途中のまま残されているものがそこかしこに…。

「おもしろ おおーい！」

思わず叫んでしまう。とても楽しかった。なんとも不思議で、おかしくて面白くて謎めいていて、現実離れしている。なんなんだこの景色は！

それから火口もでかくて、綺麗で、まわりの景色がまたまた素晴らしかった。この島はモアイだけではない。モアイがなくても景色がとても素晴らしいところであるとわかった。この素晴らしさは来ないとわからない。説明しづらい。写真でもこの素晴らしい景色については紹介されているのを見たことがない。モアイ抜きでも十分すごいぞ。さて、レンタカーは10時から8時間。もう返却時刻を過ぎそうだったので今日はここまでにして宿に帰った。

彼らに、一緒に夕食はどうかと誘われた。DDAと私は当てはないので、お奨めのレストランへ連れて行ってもらうことにした。そこでは私を除く3人ともスペイン語が話せるということを知った。私だけわからん。通訳してもらって、魚、ご飯、ビールを注文した。乾杯は

「Salud (サルー)！」

である。ビール、うめえー。玉葱とトマトのソースがかかった魚、うんめえええー！この一年間で一番うまい料理だ。幸せだ！幸せ一杯だああー！！

彼らの話はアメリカのJapanese societyの話からはじまり、戦争、経済の話へ及んだ。途中、日本の輸出の何%ぐらいがアジアへ向けられているのか、日本が優勢なのは自動車やオートメーション機器などだろう、それについてはエンジニアの彼の方が詳しいだろう…と私に振られたが、そんな話題にやついていけませんぜ…。

一人で思っきり劣等生気分を味わった。こういう劣等感って大事だよなー、とか思いながら。この旅はカンボジアのようにはいかないな。インドでMUNJUNと一緒にいたときみたいだ。話に加われない。スペイン語ペラペラの人と一緒にいると、どうしても現地の人と1対1になれないよなあ。TVで『Mr. ビーン』をやっていた。店じゅう笑いの渦だった。すごいぞMr. ビーン。

帰りは22時を過ぎた。長い長い食事だったが満足だ。スーパーマーケットで水1.5リッ

トルを買った。T/Cが使えたが、パスポート番号を控えられるときのやりとりはDDAがいなかったら大変だった。数字ぐらいスペイン語覚えとけよなーと思われただろう。やはりスペイン語の勉強が全然足りない。知識として持っているのと、使いこなせるのとは違う。まだ南米へ行くのには早すぎるぞ。未熟者。

6.2.3 Gracias! 1998年7月22日(水)

疲れた。ようやくひと休み。ここは島の西側、TE PEUよりちょっと先のところだ。もうハンガロアが見えない。よく歩いたなあ。10時ごろから約2時間半歩き通しだった。日が照ってきて海がきれいだ。山の景色は牧歌的で美しい。この辺にモアイあるはずなんだけどな。岩はごろごろしてるけど、それらしいものは全然見当たらないぞ。海はどこを見渡しても水平線で、島や船の姿はない。「絶海の孤島」を感じることができる。鳥のさえずりが耳に心地よい。途中、数頭の牛にめっちゃめっちゃ見られた。ずっとじーっとこっちを見て、全然目をそらさないのだ。ここの牛は茶色いのと黒いのがいる。毛はとても美しい。やっぱりインドの牛とは違うな。角は立派で顔には威厳がある。前を通るときちょっと怖かったぞ。

タハイを通ったときには、近くの家から男の子が石掘りの小さなモアイを1つ持って走って来た。その後に彼の小さな妹も走ってついてきた。

「Hola.」

と言った後、いらぬよというとすぐに走って家に戻ってしまった。その後に小さな妹もタタタタ…とついて行った。おいおい、売りたいならもうちょっとねばってもいいんじゃないの？でもそれでいい。

しばらく休んだ後TE PEUの表示のところへ戻ると、DDAがバイクでやって来た(13:30ごろ)。彼はここから島を一周するつもりだそうだ。道はないんだけど、バイクなら行けるでしょう。彼と別れてからアフ・アキビ方向へ歩いた。昨日行ったTE PAMUの洞窟を通り過ぎ、7体のモアイが見えたところで右にハンガロアへ行く道が分岐していた。ここを通って戻ろう。右へ曲がり、歩いてしばらく行くと、スズキのバイクに乗った人が後ろからやって来て止まった。

「ハンガロアに行くのか？乗れ。」

と言ってきた。何の警戒心もわかなかったので、遠慮なく乗せてもらった。

「ハポンか？このバイクはハポン製だ。」

と言っていた。いやー、助かった。結構長い道のりだ。歩いていたら夕方になっただろう。14:30ぐらいにハンガロアの教会前に着き、そこで降ろしてもらった。

「Muchas gracias.」

とお礼を言うと、

「De nada, amigo. Chao!」

と言って彼は颯爽と去っていった。いやー、おっちゃん、かっこいいぜ！初めてスペイン語で会話しきものになって、うれしかった。

早く戻れたので時間ができた。オロンゴへ行こう。その前に博物館へ…と思ったのだ

が、海岸へ向かって歩いたら博物館へは結構距離があるとわかったので、そのままオロンゴの方へ歩き始めた。(結局オロンゴの方がかなり遠かったのだが。) 食人洞窟アナ・カイ・タンガタはどこだ? と思って歩いたのだが、地図を見て予想したよりもっと遠かった。小さな港の近くには頭の落ちたモアイが1体あった。それを眺めながらそこでちょっと休憩した。この港は本当に小さい。小さな漁船用だ。この島への船便はないけど、あったとしても停泊するところがないよなあ。

洞窟のちょっと手前で犬に激しく吠えられた。ずっとついてきて今にも噛みつきそうな勢いだった。怖かったぞ。帰りもこんな目に会うのかな。やだなー。洞窟は驚くほど大きかった。断崖から見たのだが、奥行きもありそうだった。海の水は何とも言えない美しい色で、崖の高さと洞窟の巨大さと「食人」という事実から来る不気味な雰囲気をやわらげてくれている。近くでは釣りをしている人が何人かいた。しかしすごい崖だ。波も迫力がある。荒い岸壁にドドーンと打ち寄せ、あちこちで高いしぶきを上げている。景色を見ながら思わず

「東映。」

とつぶやいてしまった。なんか三角マークの「東映」って字が出てきそうな感じなのだ。

さて、その後長い長い登り坂を孤独な闘いが続いた。体力ねーなあー。あ、今朝飯食ってないや。今日口にしたのは今背中にしょってる水だけだ。力出ないわな、そりゃ。やたらと長い道のりだった。2時間以上歩き、17:20分ごろ頂上に着いた。またまたものすごい景色だ。オロンゴの鳥人の家などよりも島の景色に圧倒される。大きなラノ・カオの火口。火口の淵と切り立った崖。はるか下に見える海面、沖合いのモツ・ヌイ。これはすごい。うーん、他に言葉ないかな。ポキャブラリー少ないな。文章表現力が乏しいぞ。言い表せない。ちょっと写真撮り過ぎた。

18:30を過ぎ、疲れていたが仕方なく歩いて下り始めた。途中、車が私を追い越して行く。いいなー。あ、登りの最初のとき、あまりの景色の良さに歌が口から飛び出したっけ。それがなぜか

「ちーらしー、寿司いーなーら …」

と北島三郎のすし太郎の歌だった。一人で大爆笑した。なんでこんな歌なんだ? しばらく歩いて下りていると、車が後ろから来た。通り過ぎるのかと思ったら速度を緩め、止まった。乗っているのは若い夫婦だ。スペイン語で何やら聞かれたが全然わからない。でも止まってくれたということは乗せてくれようとしているのだろう。

「ハンガロア。」

と行き先を言い、何か言われたので

「Si。」

と言って乗せてもらった。なんて親切な人たちなんだ。止まってくれという意志表示もせず、歩きながら《車、楽そうでいいなあ〜》とか思っている人間に向こうから声をかけてくれるとは。メインストリートで降ろしてもらった。

「Muchas gracias。」

今日2回目だ。とてもうれしい。なんか人と触れ合っているという感じがする。挨拶だけだが、スペイン語しゃべってるし。

20時ちょい前、コパカバーナというレストランに入った。客は誰もいない。店の人も誰もいない。きれいないいレストランだ。でもちょっと高そうな感じ。声をかけると奥からおじさんが出てきた。

「スペイン語ダメか？ 英語か？」

と聞かれたので英語にしてくれと答えた。魚とサラダを注文した。そして飲み物はビール。昨日と同じ CRISTAL というビールが出てきた。グラスに注ぎ、一気に飲んだ。プハー、うめー。魚は昨日のがとてもうまかったので他の店でも試してみようと思ったのだ。しかし…量はすごいがなんだこれ。直径約 10cm の切り身が 2 つ、付け合わせもなく皿に載っている。しかもこれ、ただバターで焼いただけなんじゃないの？ うーん、昨日の店の勝ちだ。サラダは別の皿にドド〜んと、トマトのスライスとキャベツだ。これも量が多い。量の多さはうれしかったが、ちょっと味と見た目が物足りなかった。最後に紅茶を頼んだら、切らしててないそう。あまり飲む人いないのかな。コーヒーを頼んだら、お湯の入ったカップと、Nestle のインスタントコーヒーの缶と粉ミルクと砂糖が出て来た…。なんだこりゃ。インスタントでも裏に入れてから出してくれればいいのに。どうせ私は違いのわかる男じゃないんだから。

途中から客（おじさん）が来て、一人で隣のテーブルに座った。その後は中年夫婦が来た。店にはこの店の娘らしい中学生ぐらいの女の子がいて、店内に流している曲にノッて体を揺らしていた。

レストランを出てから 2 軒の土産屋に寄っていくつか買物をした。結構高いな。朝買ったフィルムも高かった。全て日本で買うのと同じぐらいの値段だ。あまり土産買えないなあ。

食料品店で水を買ってから宿への帰り道、視界の上の方がにぎやかなのでふと上を見ると…満天の星！ごちゃーっと星がいっぱい光っていた。すごい！天の川がはっきりわかる。うわー。しばらく立ち止まってしまった。こんなにクリアな星空は多分、研修航海のとき以来だろう。街灯がじゃまだだったので、宿を通り越して海の方へ歩いた。南十字星ってどれだっけ。探したけどわからなかった。北斗七星らしきものはあったけど、北斗七星って南半球で見えるんだっけ？ 見えないよなあ。しかしすごい星空だった。

土産屋で 6 枚買ったポストカードを宿に帰ってから書いた。明日郵便局に出しに行こう。その後マウンテンバイクを借りて島の東側を見に行こうと思う。明日が最後だ。

6.2.4 青空のアナケナ 1998 年 7 月 23 日 (木)

昨日遅かったので、起きたのは 10 時ごろだった。朝食を食べに食堂へ行くと、DDA が食事を終えたところだった。彼は別の部屋が整ったので昨日の夜からそちらへ移っていた。今日は、おばちゃんが目玉焼を焼いてくれた。おお、これがあるだけで随分違うぞ。パンも食べ放題だ。あんまりおいしくないけど。

私が食べ始めると、DDA に今日また一緒に車を借りないかと誘われた。どうしよう。でも東へ行くにはやはり車の方が便利だろうなあ。OK した。ただ、昨日博物館へ行かなかったので今日行きたい。レンタカーはこの宿で借りると高いし、車も良くないので他の店へ行くことにした。DDA が良いレンタカー屋を知っているそう。Hertz レンタカーと

いう店なのだが、DDA はどこだったかはっきり覚えていないらしい。2人で探しながらずーっと歩いた。行く途中にマーケットに寄り、木彫りのモアイを1つとTシャツを1枚買った。人に聞きながら Hertz を探したのだが、別の良い店を教えてもらったのでそっちへ行くことにした。

車を借りた店は木彫り職人がいる店で、DDA は知り合いだったようだ。昨日会ったのかな。木彫りや石掘りが並んだ机があるだけの殺風景な店だが、DDA によればこの店のものは伝統的なスタイルで彫ってある良い品だそうだ。モアイだけでなく、タンガタ・マヌ²やカヴァカヴァ³の面白い木彫りが並んでいる。カヴァカヴァも頭が二つあるものや、球体から頭が出ているという訳のわからないものなど、バリエーションが豊富だ。ワニみたいだけどワニじゃない、何だかわからないもの⁴もある。でも欲しい思う大きさのものは高いな。とても買えん。DDA と店のおっちゃんは、木彫りや木彫りの写真集を見ながら、石の釣り針のカーブがどうのこうのという話しをしている。DDA はポリネシアの文化にとっても詳しいようだ。釣り針の形は年代や地域によって特徴があるらしい。

郵便局でポストカードを出した後、車に乗り込み、昨日行ったオロンゴにまた行った。途中、歩いている人を見かけたので、そのスイスから来たという2人(夫婦?)も乗せて上へ登った。やはり景色が美しい。そして火口は何度見ても凄い。モツ・ヌイ、モツ・イティは遠い。鳥人儀礼であそこまで泳いだと言うが、本当にあんなところまで泳げたのか? ここの崖っ淵も凄まじい。ここから降りたのかな。降りたとしたらどうやって降りたんだろう。今日は今までで一番天気が良い。ここでは同じ宿に泊まっているオーストラリア人カップルにも会った。景色を眺めながら、しばらくのんびりした。

その後東海岸へ行き、倒れているモアイをたくさん見たりしたが、荒削りの海岸に波が打ち寄せる様と、空と海の色が素晴らしかった。この美しさは筆舌に尽くしがたい。そして東海岸沿いに北上した。途中にトランペット・ストーンがあるはずなのだが、どこにあったのかわからなかった。倒れている大きなモアイがある近くに、表面がつるつるの丸い石「テ・ピト・クラ(光りのへそ)」があり、ここでは南米系美女に出会った。すごい美人! 足が長えー、体細えー。綺麗えー。彼氏&友達と一緒に島をまわっているそうだ。

アナケナビーチはとても美しかった。この前きたときよりも天気の良いせいだろう。今日なら泳げるな。砂浜に座り込み、DDA にタヒチ情報を聞いた。タヒチ島より、モーレア島へ行って過ごす方が良いと教えられた。どうやって行くかも教えてもらった。そんな話をしながら、のんびりした。とても気持ちいい。幸せな気分だ。

《素晴らしい景色》

今日はこの一言に尽きる。

宿代は\$65。今日出発するってことを、本当は今朝言わなければならなかったらしい。宿に帰っておばちゃんに言うと、おばちゃんは私が今日出るってことに気づいてなかったようだ。ごめんなさい。でも宿帳チェックしてないのか? いつ出るか書いたはずだけど。1

²鳥人。長いくちばしを持つ頭で体は人間の像。オロンゴの岩にはこの鳥人の姿がたくさん彫られている。

³モアイ・カヴァカヴァ。髭、長い耳、大きい目、猫背で痩せていて、つき出た肋骨の人間の像。島にたどり着いた最初の痩せた住民を表現しているとも言われるが、本当は何なのかわかっていない。

⁴後で調べたら、これはモコ・タンガタ(とかげ人間)の像だそうだ。

泊\$25のはずだが、\$20+20+25なのは、DDAと一緒に部屋になった分を考えて割引してくれたのだろう。でもお釣がないようだ。T/Cで\$80分渡しちゃったんだけど。

しかし、この島の村で使ったUS\$のCASHはどこへ消えるんだ？ずっとUS\$で払ってたし、旅行者は大抵US\$を使ってるだろ？なんでみんなチリ・ペソでしか釣りをくれないうら。不思議だ。ここへ来てからドルのCASHはなくなる一方で、増えることはなかった。結局、宿代の釣りはDDAが立て替えてくれた。明日レベッカおばちゃんからもらうから気にするなと言ってくれたが、申し訳なかった。どうもありがとう。

空港へ行くタクシーをDDAがつかまえてきてくれた。遠くないから歩きでも良かったんだけど。同宿のおじさんも同じ飛行機に乗るらしい、おじさんとDDA、そしてオーストラリアンの兄ちゃんの4人でタクシーに乗った。タクシーに乗る前、

「荷物それだけ？」

と言われた。こっちにしてみりゃ、君たち何でそんなに荷物があるんだという感じだ。その荷物の多さ、とても不思議だ。何入ってるの？そんなこっちゃアジア旅行はできんぞ。車内ではDDAが、オーストラリアンの彼は既に彼女と結婚して何年にもなるという話を聞いて、

「何！彼女結婚してるのか！おお、彼女とのロマンスがあ〜。」

と言ってみんなを笑わせてくれた。空港へ着き、DDAと握手をして別れの挨拶をした。

「Have a nice °ight!」

「Enjoy your °ight!」

なぜ彼らはあんなに人を気持ち良く送り出すのがうまいのだろう。私には、あれほどのことができるだろうか。

空港ではトオルさんと再会。同じ飛行機でタヒチへ向かう。トオルさんから、リンダさんの面白い話を聞いた。彼女がここへ来た理由を。彼女が見た不思議な夢。そしてその夢に出てきた石像のある島を探してここへ来たという話。アフ・アキビで初めて会った時に、DDAからマルケサス諸島の情報を熱心に聞いていたことも。へえ〜。

空港には小っちゃな土産もの屋が3つある。デザインがいい欲しかったTシャツはどこへ行っても最後まで\$20だった。\$15のTシャツも買ったけど、誰かにあげよう。しかし物価高いなあ。土産屋のおばさんが、TAPATI RAPA NUI '99のポスターをタダでくれた。レストランで見かけてからずっと、《どこかで手に入らないかなー》と思っていたのでとてもうれしい。やった！ありがとう！

出国手続きは簡単だ。出国ロビー（言葉の印象と実物はかけ離れている）にはまた土産物屋があったが、大体どれも島の店で買うのと同じ値段だ。村で私が買った地図は\$10だったが、ここではちょっと高く\$12。\$10だったら買って誰かのお土産にしようかと思ったんだけどな。あ、木彫りのカヴァカヴァ、いいなあ。ちょっと欲しい。でも\$15か。金ないな。T/Cも残りわずかだし、タヒチも物価高いから支出を抑えないと。まあ、石彫りのモアイ買ったからいいじゃん。うーん、でもちょっと欲しいぞ…結局買わなかった。

搭乗のために待ち合いロビーから外へ出たら雨だ。今日一日素晴らしい天気だったのに、最後の最後に雨か…。あ、ポスターちょっと濡れちゃった。あー。この島は空港と飛行機が頼みの綱だ。ここを中心に全てがまわっている。週に3回しか来ない飛行機が来る

と、空港はあらゆる人々でごったがえす。滞在中に見かけた人がたくさんいた。さようなら、ラパ・ヌイ。

飛行機の席は窓際。非常口のところなので前が広くて嬉しい。

21:55。めちゃめちゃ揺れるー。

3時(現地時刻23:00)タヒチ着。またあの楽団と、小さな花でお出迎えた。いいねえー。トオルさんと一緒に、空港近くに宿をとった。シャワーは水だけど、暑いから気にならない。便器にはなぜか便座がない…。どうするんだ、これ。でもそんなことではもう驚かないな。部屋は無駄に広いぞ。空港のインフォメーションで、ここはPAPEETEの街にある宿より静かだと聞いたのだが、犬と鶏と飛行機がうるさい。でも疲れてたのですぐ眠れた。ただ、時差があるので4時ごろ目が覚めてしまった。やっぱりまた寝た。

6.3 南国の楽園 { タヒチ {

6.3.1 モーレア島 1998年7月24日(金)

朝食は屋外のテーブルで。フランスパンと紅茶、バター、ジャム。それだけ。でもパンはまるまる1本出てる。紅茶は直径15cmぐらいのでっかいカップにリプトンティーバッグ。そして片手鍋にお湯。まるでキャンプだ。例のNestleのインスタントコーヒーの缶もある。トオルさん(31才と判明)は、ICU(国際基督教大学)を卒業してからSONYに入り、MBA(Master of Business Administration)をとりにアメリカへ行っていたそう。この先はハワイへ寄って帰国するということである。

今日とはりあえずDDAに勧められたモーレア島へ行くつもりだ。朝食後すぐ宿を出て、トオルさんと一緒にル・トラックでパペーテへ向かった。彼はチリ・ペソを換金したいのだが、空港でもポリ銀(Banque de Polynesie)でもダメだった。なんでだろう。イースター島への便があるところなんだから、チリ・ペソ持って来る人多いだろうに。ポリ銀のおばさんによると、タヒチ銀行(Banque de Tahiti)ならできるそう。私はポリ銀で1万円をCFPに替えた。その後彼はタヒチ銀行へ、私はモーレア行きフェリー乗場へ向かった。また会うかもしれないが、とりあえずお別れ。

フェリー乗り場でチケットを買い、時間はまだあったが船に乗り込んだ。この船、タマリイ・モーレアVIIIは元日本の船だったのだろうか。浮きに「かなや丸」と書いてあったり、ドアの上に「客室入口」と日本語があったりする。上のデッキへ出ると、椅子が汚い。掃除ぐらいしろよ。いかにも安い船という感じだ。でもかまわず座った。今日はタヒチの山に雲がかかってなくて、島が良く見える。天気も最高。とても暑い。そういえば船に乗るのって久しぶりだな。これは1時間ぐらいかかる一番遅い船だそうだが、船旅を楽しむには丁度良いと思う。

9:52(もはやこの腕時計が合ってるという確信が持てない)、汽笛が2回鳴った。出航だ。9:54再び汽笛2回。9:56汽笛2回。まだかよ。10:00出航(腕時計は合ってるようだ)。10:27タヒチ島の全景が見える。海もキラキラしてきれいだ。ガイドブックには、船は相当揺れると書いてあったがそうでもない。大したことはないじゃん。船に揺られて海を見て

いると、思わず山水譜を口ずさんでしまう。

「 双一弓一たゆ一むうーう... 」

望星丸二世 … 懐かしいなあ。

船がモーレアに着いてからインフォメーションへ行ってみると誰もいない。幾つか地図やパンフレットがあるだけだ。どうしよう。とりあえず空港のインフォメーションまで行けば宿情報を得られるだろう。ル・トラックは止まっていたが、運転手も客も誰もいなかったのでも乗るのをあきらめて歩きはじめた。しばらく行くとあるトラックが止まって、空港近くまで乗せてくれた。何人が旅行者らしき人も乗っている。

「^{メルシ}^{ボク} Merci beaucoup. 」

その後空港まで歩くと… あれ？ ここ滑走路じゃん。おい、柵ぐらい作っとけよ。小さな空港だ。でもインフォメーションはフェリー乗場と同じで誰もいない。うそー。どうしよう。こうなったら歩いてやる！ とりあえずガイドブックでゲストハウスを探す。ここから一番近いところに決め、歩くことにした。

暑い長い道だった。1時間半ぐらい歩いて ^{モートル} ^{アルベル} Motel Albert に着いた。部屋はあるという。良かったー。おお?! しっかりすごい部屋だ。1人で泊まるのはもったいない。キッチンがある。冷蔵庫がある。こ、これは住めるじゃないか！ 部屋を掃除していたお姉さんに、

「フランス語は？」

と聞かれた。フランス語できるかって聞かれることが多いけど、やっぱりフランス語喋れると対応ちがうのかな。確かに英語だとコミュニケーションが浅い感じはするけど。シャワーを浴び、洗濯をしてからベッドでくつろいだ。

会話集でちょっと調べたら…。イースター島からタヒチへの便の出入国カードにはフランス語とスペイン語しかなかったんで、オークランドからの便（フランス語、英語、日本語あり）のときの記憶を頼りに《大体この辺にこれ書いたよなー》とか思いながら適当に書いたけど、思いっきり間違ってた。旧姓の欄に名前書きちまってた。名のところにはフライトナンバーを書いた。すなわち次のようになっていた。

姓	SEKIYAMA
旧姓	TOMOYUKI
名	LA833

こ、これでは私は「関山 LA833」だ。昔は「友之 LA833」だったということになる。すごい間違いだ。イミグレの人、全然見てないな。名前に数字入ってる人なんているかよ。

夕方、近所を散策した。大きな街はなく、のんびりムードがただよっているいい島だ。でも宿近くにビーチはないな。道端で、めっちゃめっちゃカラフルな魚を釣り下げて売っているのを見かけた。トロピカルなブルーやグリーンの輝く魚だ。あんまりうまそうじゃない…。夕飯を仕入れに食料品店へ行くと、店は 17:00 で閉まっていた！

「しまったぁー！」

冗談を言っている訳ではない。どうしよう、腹減ったぞ。他に店ないし、腹がグーグー鳴っている。しょうがない、レストラン入るか…。

最高の贅沢をしてしまった。とても幸せな気分だ。うまい！うまい！うまい！食べながら顔がニコニコする。ここはイタリアンレストラン^{アルフレッドス} Alfredo's。宿の近くの店だ。始め前を通ったとき、私はTシャツに単パンという格好だった。なんか入りにくい雰囲気だったので、とりあえず宿に戻ってから襟着きのシャツと、下はしょうがないけどジーンズ(すなわちただのいつもの格好)に着替えた。Tシャツ単パンよりはましだろうと思って。しかし案の定、料理は高い。結局、ビールと、Aperitif というところから勤められるままに1品、そしてこれまた今日のおすすめシーフードのフィットチーネとコーヒーを食し、全部で約4,000CFP(4000円強)。高かったけど、確かにすばらしいお味でございました。たいへん感動的でございました。

「うまいぞおおー！」

と大声で叫んで、世界中にこの感動を伝えたい。なんて幸せな気分なんだあー。でも、2人用テーブルで向かい側に誰も座ってないってのは、ものすごく淋しいぞ。周りはファミリーや夫婦ばかりだし。店のおじさんはとても感じのいい人だけど、私と話し込んでばかりもいられんよな。客が増えてきて忙しそうだ。さみしいー。でもうまいー。

しかし、こんなに食事で感動したのは久しぶりだ。ラパ・ヌイの魚料理もこいつには負ける。やっぱり食はこうでなくっちゃ。これと比べちゃいけないけど、なんなんだいつも食ってるあの寮飯は！あれが「食事」なのか？いや、今この瞬間のものとあれを同じ「食事」という言葉で表すのは不適切だ。全然違う。いやー素晴らしかった。でも日本でイタリアンレストランなんて入ったことなかったな。

帰り道、星がとてもきれいだ。南十字星を確認。宿に帰ってから庭に椅子を出して、しばし星のショーを観賞。あー、またまた幸せ。

明日はビーチに行こうと。

6.3.2 O Tahiti e 1998年7月25日(土)

朝(夜中かな?)、雨が降った。起きると天気は曇りだ。8:40ごろ荷物をまとめ、宿を出た。出るとき、受け付け小屋にいた兄ちゃんに

「Japonais?」

と聞かれた。そうだと答えると、なぜか手を横にやって片足を上げるポーズをされた。なんだあ? ああ、『ベストキッド』か。一応、

「ヒョオオー。」

とか言って同じポーズとっといた。8:45にル・トラックがClub Medを出るはずなので、通りかかったときに捕まえようというつもりで歩いた。目的地はホテルソフィテル・イア・オラ。15分ほど歩くと、後ろから来た赤いトラックが横に止まった。

「どこ行くんだ?」

と(多分)聞かれたので

「エアポート。」

と言ったが通じない。「エアロ…」と発音したらわかってくれたようだ。ラッキーだ。歩かずに済んだぞ。ああそうか、フランス語で飛行機はAvionだった。おじさんが教えてく

れたんで思い出した。学生時代の第2外国語、全然身につけてないな。車なので9:10ごろ、もうついてしまった。ソフィテル・イア・オラのビーチへ行こうと思っていたが曇りだ。おじさんにお礼を言って別れた後、とりあえず空港の中に入った。

空港でしばらくぼけーっと人間ウォッチングした後、空港を出て歩き始めた。坂がとてもしつこい。でもソフィテル・イア・オラの近くの高いところに来ると、とても素晴らしい景色だ。勢いのある木々の向こうに水上コテージが並び、透き通った海が広がっている。あー気持ちいいー。ソフィテル・イア・オラに着いてからはビーチへずかずかと入り(ここはビジターもOK)ビーチで寝る。ひたすら寝る。頭ん中からっぽ。ぼけー。気持ちいいー。ちょっと海にも入ってみたが、波うち際は下が石で足の裏が痛い。暑さで火照った腕と足、顔をつけてからまたビーチの椅子に寝転んだ。そしてまたボケーっとした。天気と景色は素晴らしく、人混みもなく、とても静かだ。いやー、これぞビーチリゾート。

15時ごろ白い砂浜に別れを告げ、フェリードックへ向かって歩いた。30~40分で到着。すぐ船の券を買って乗り込んだ。船内でコーラを買って一番上のデッキまで登って座りこんだ。あーうまい。

「おお。誰かと思ったら。」

そこにトオルさんが階段を登って現れた。前より日焼けしてる。今朝モーレアに来て、1日いたそうだ。フェリーは16:00発。モーレアの大きな山がだんだん離れていく。船は来たときよりも揺れた。でも楽しいぞ。30分でパペーテに到着すると、そこには大きな客船が停泊していた。こんな船、歳とって金持ってて暇がないと乗れないんだろうなあ二人で話した。

船を降りてからは、やることがない。タヒチの屋台、ルロットはまだ出ていない。とりあえず市場方面へ歩き始めると、途中みんなが並んでいるところを見かけた。ポスターを見るとタヒチアンダンスのショーがあるみたいだ。特設会場が組んであって、今は祭期間中らしい。聞いてみるとショーは20時から22時までだと言う。いいねえ。早速2人で行列に並んだ。券を買う時、座席の図で丁度2つ空いているところがあったので、そこしようと思った。トオルさんが2つ空いているところを指さして、

「この席は見やすい？」

と売場のおばさんに聞いたら、いきなり笑われた。なんだ？そしてそのおばさんはおじさんと呼んだ。私たちはなんで笑われたのかわからなかった。もしかしてこの席はなんかあるのか？あの笑いは「やーい、引っかけたあー」って意味か？

実は笑われたのは英語だったかららしい。いきなりフランス語じゃない言葉で話しかけられたんで、「わからんわー」ってんで笑ったようだ。チケットは1人1,000CFP(1,000円強)だった。安い！モーレアでTiki Villageのショーを見に行こうと思ったのだが、ディナー込みで7,500CFPだったのであきらめたのだ。このショーを見つけて、とてもラッキーだった。チケットを取った後、トオルさんがホテルに戻ってシャワーを浴びてきたいというので、私はここで待つことにした。

ベンチに腰かけていると、準備をしている兄ちゃんに話しかけられた。でもフランス語だ。「日本人です」ってぐらいしか言えない。あー、くやしい、会話できない。彼は英語はダメなようだ。二言三言やりとりしただけで、会話は続かなかった。せっかくの話すチャ

ンスなのに、もったいない。

近くをうろうろすると、ルロットが出ていた。トラックの屋台だ。中華の店が多いが、いろいろな国の料理がある。大きな豚を開いて焼いたりする。また、ステーキ、クレープ、ピザ、魚…いろいろあってとても楽しい。あれも食べたい、これも食べたい。目移りしてしまう。トオルさんが戻ってきてからルロットで食事することにした。なんかアジアを感じる。うれしい。こういうの大好きだ。ここへ来て、初めて日本人の新婚旅行客らしきカップルを何組か見かけた。手をつないで歩いてたりして、いかにも「新婚旅行」だ。あんまり俺達と歳ちがわない感じだな。しかし、なんでこんなところに新婚旅行来んのかねえ。面白いかな？

まず、SASHIMIを食べた。確かに刺身だ。でも下に大根じゃなくてキャベツの線切りが敷いてある。つけるのは醤油じゃなくてハンバーグのソースみたいな味がするものだったが、結構うまかった。パンが付いていて、コーラも頼んだ。変な組合せ。ルロットではアルコールは出してないそう。その後、別の店で Chow Men を食べた。量が多くてトオルさんは残した。2人で1皿頼めば良かったな。私は全部食べたけど、ちょっときつかった。ジュースは変な形のPET容器に入った炭酸オレンジジュースを飲んだ。Chow Menは具たくさんだったけど油っこくて、麺もインスタントラーメンみたいであまりうまくなかった。ちょっと食い過ぎだな。今日は何も食べてなかったから入ったけど。

さて、ショーはとてとても良かった！素晴らしかった！これを見なかったらタヒチに対する印象はかなり違っていただろう。見て良かった。体に響くあの打楽器の音。耳に心地よいコーラス。きれいなお姉さんの魅惑のダンス。男たちの格好いい力強いダンス。幻想的で素晴らしかった。これはお勧めだ。日本で想像していたのと違って、「民族」を感じることができた。彼らにとっても、これは楽しいお祭り騒ぎなのだろう。相当気分が昂ぶらしく、ショーが全部終わって舞台裏へ引きあげてからも、太鼓をたたいたり、叫んだり歌ったりして盛り上がっていた。タヒチは都会で、特に面白いところはないなーと思っていたが、このダンスを見たらとても印象が変わった。あー、新婚旅行でここへ来るといふ理由もわからなくはないねえ。来たらこのショーは必ず見るべきだよ。

空港までタクシーに乗った。空港に着いてからトオルさんがチェックインに行こうとすると、

「あ、鞆、タクシーん中に忘れた。」

と言う。なにー！チケットはその鞆の中だそう。もうタクシーは行ってしまっていた。どうしよう。私の方がおろおろした。その後の彼の行動は素早かった。あの英語力があれば何も恐くはないだろう。2人とも、もうこの通貨は使い切ってしまったので、町へ戻るタクシー代はない。両替しようにも、空港の両替所は閉まっている。この時間、両替所は飛行機が来た時しか開かないのだ。

彼はインフォメーションに行き、警察に行き、警察の車で街へ鞆を取りに行った。どうにかタクシーに連絡がついたらしく、彼が空港に戻ってきた。23:00 ごろタクシーが空港に来て、鞆は彼の手もとに戻り、無事チェックインすることができた。いやー最後の最後にやってくれるぜ。でも、あれだけ英語ができるといいなあ。私はその間ずっと、空港で彼の荷物を預って見張りをしているだけだった。

彼が乗る便はハワイ行きだ。私よりも先の出発なので、出国ゲート前で別れることとなった。出国ゲート前では別れの踊りや歌がまた繰り広げられて、楽しかった。今回は民族の踊りが見られた。あるタヒチ人の男性を見送りに来た5人の男がフロアで踊る。上半身裸。裸足。楽器なし。まさに「別れの儀式」だった。いいなあ。

売店に今日見たショー『O Tahiti e』のCDがあったので、そのCDとタヒチの紅茶を買った。ここも物価高いな。CDが高かったので金がなく、HINANO BEERのTシャツは買えなかった。タヒチではずいぶん金使った気がする。帰ってから計算したら驚きの数字が出るかもしれない。

6.4 ゆっくり帰ろう { 南太平洋2 {

6.4.1 消えた日曜日 1998年7月26日(日)

飛行機はラロトンガ経由オークランド行き。2:20発。4:30ラロトンガ着。オークランドに26日9:51着(現地時27日7:51)。日付変更線を越えたので、日曜日が消えてなくなった。

6.4.2 マオリの呪い? 1998年7月27日(月)

AUCKLAND空港で飲んだ水がいけなかった。断続的に来る激しい腹の痛み。下痢。帰れるのかとても心配になった。

今日、オークランドでは空港に荷物を預け、またAirBusに載って街へ出かけた。出かるときに空港の飲料水を飲んだのだ。喉が乾いていたのでグビグビ飲んだ。街では例のアジア屋台の店に行ったがまだ開店準備中だった。時間が早すぎたのだろう。残念。街中は寒い。ショッピングモールで本屋などをうろつろした。途中でトイレに行きたくなり、えらく探しまわった。大変だ。なんとか危機一髪で見つけることができて入った。ほーっ。

ダウンタウンエアターミナルの土産店では、タヒチのティキ像みたいなのが売っていた。マオリのクラフトだそうだ。ラロトンガにもこんなのあったし、多分ポリネシアにはどこにでもあるんだろう。各地でちょっとずつ形は違うけど、同じ系統だというのが良くわかる。全部並べてみたいな。

今回は前よりも更に時間がないので、すぐバス停へ戻った。バスを待っていると、あるおじさんにちょっと来てくれと言われた。その人はなんとかExpressという、AirBusとは別の小さな空港バスのドライバーだった。なんか、おじさんはキーを車の中に付けたままドアをロックしてしまっただけ。窓がすこし開いている。おじさんの腕は太くて入らないので、代りに腕を突っ込んでドアロックを外してくれという。なあんた、何言われんのかちょっとドキドキしたぞ。ドアロックは簡単に外れた。でもあれ、もしあの車がおじさんの車じゃなかったら怖いな。

AirBusはちょっと遅れて来た。空港へ戻る途中、なんかお腹がちょっと痛い。寒いせいだろう。なるべく車内エアコンの風が来ないようにし、お腹をかばった。でも下痢のとき

とちょっと違う感じだ。刺すような痛み…。

空港へ着き、預けていた荷物をとても感じのいいお姉さんから受け取り、チェックインカウンタの前に並んだ。あまりたくさんは並んでいないが、進むのがものすごく遅い。何やってんだよ。みんなすさまじい量の荷物だ。私のように背中にしょってる1個だけという人は誰もいない。おーい、早くしてくれー。荷物がとても重く感じられて、下に降ろした。立ってるのがつらい。ようやく順番が来たが、なんか手続きがスムーズじゃない。うーん、お姉さん綺麗なんだけどな。笑顔も素敵。でも、腹痛いぞ。こっちも笑顔で会話を楽しみたいけど、そんな余裕はない。うー、トイレ行きたい…。で、出そう…。こんな時に限ってトラブルは起こる。ボーディングパスを出す機械の紙詰まりだ。うおー。よっぽど「トイレ行くから後で…」

と言いたかったが、また並ぶのはいやなので必死にこらえた。あの腹の痛みは大変だった。多分私は、紙詰まりぐらいでえらくイライラする、とても不機嫌な客だと思われただろう。お姉さんが終始笑顔だったのは救いだったが、本来ならば紙詰まりなんてのが起こっても、「No problem.」

とか言って笑顔で余裕を見せたいところだ。それをきっかけに、会話もはずんで笑いのひとつも出るに違いない。あーもったいない。ボーディングパスを受け取り、とにかくトイレへ。完全なる下痢ピー様とご対面でございます。

出国手続きをおわらせ、足早に搭乗 GATE 1 へ向かった。搭乗 GATE 前のベンチではすぐ入らずにぎりぎりまでねばった。一度入ると飛行機に乗るまでトイレがないからだ。幸い、GATE 1 のすぐ近くにトイレがある。ベンチに座り、お腹を押えて目をつぶった。痛い痛い痛いー…。腹の内側から針で刺されている感じだ。立てない。横になりたい。なんかみんなにじろじろ見られてるぞ…。

時間ぎりぎりになったので、気力をふりしぼって立ち上がった。GATE 1 入ってからなぜかあまり痛くなくなった。マオリの呪いか？ なんとか飛行機に乗り込み、飛行機は 14:14 ごろデッキを離れた。席はずいぶん空いている。これって途中どこにも寄らないのに、なんでこんなに席空いてんだらう。月曜日だからかな。

0:40 (現地時 20:40) シンガポールのチャンギ空港着。やっぱり暑い。腹の痛みはおさまった。なんだったんだらう。モアイとティキとマオリが喧嘩でもしたかな。

オークランドでは本当にもうダメかと思った。飛行機乗らない方がいいかも…とさえ思った。とにかく痛かった。あんなのは初めてだ。それがなぜか治った。あんな痛みと下痢じゃあ治るのに相当時間かかると思っていたのに、機内で食事しても大丈夫だった。不思議だ。冷たいオレンジジュースもちょっとずつだが飲んでしまった。大丈夫だ。寒さのせいだったのか？

あの刺すような痛みから 11 時間後の今、シンガポールにいる。なんとかひと安心だ。後は福岡に飛ぶだけ。今回はけっこう日本人カップルが多いな。まあ、行きの際は高校生が多かったから、気づかなかっただけかもしれない。みんな新婚さんっぽい。私は新婚旅行でここに来ようとは思わないが、清潔で設備も整っているから旅行はしやすいだらう。でも面白いかな？

ここシンガポール空港の FOOD COURT にはあのアジアのにおいが漂っている。この

においがうれしい。腹減ってないから食わないけど、このにおいに包まれているのがとてもいい気分だ。ここはまた来ることがあるような気がする。ただ、空港からは出ないだろうけど。

腹は完全に治ったようだ。あの下痢と腹の痛みは AUCKLAND にいた間だけだった。不思議だ。

6.4.3 帰国 1998年7月28日(火)

おお、これはラッフルズクラスじゃないのか？シートが違うぞ。いいのか本当にこの席で。券を見せて聞くと、ここでいいと言う。でも液晶パネルがないな。コントローラもない。古いタイプのシートらしい。でも肘置き幅が広くて、座席スペースも広い。いいぞいいぞ。

28日(火)1:18 離陸。約5時間で福岡へ。シンガポール航空もこれで4回目だ。今回は機内スクリーンで『ブルース ブラザーズ 2000』を見た。ほとんど誰も見てないみたいだ。最後まで見たがあまり面白くなかった。その後寝たが、あつという間に朝だ。スチュワーデス(インド系美人)に起こされ、おしぼりを渡された。こんな起こされ方もいいもんだねえ~。

6:47(日本時7:50)着陸。福岡の天気は曇り。滑走路にはちょっと水たまりがあって濡れていた。税関では、とてもかわいい女性の係員が担当しているところがあった。へえー、珍しいな。はじめそこへ並んだが、2つ隣りのところが開いて、

「どうぞー。」

と男の係員に言われた。うーん、仕方ない、そっち行くか。イースター島とタヒチに行っただけと言うと、

「モアイ見て来たんですか。」

と言われた。お、何かこの兄ちゃんいいねー。日本の税関でこんなに笑顔で対応されたのって初めてだ。いつもどおり、荷物を開けることもなく、2、3の質問ですぐ終わった。

あー会社行かなくちゃ。帰ってきたら即この現実である。ロビーに出てから、私は足早に地下鉄の駅へと向かった。これから、この旅姿のまま出社だ。福岡駅でもゆっくりする暇はなく、すぐJRに乗り換えだ。黒崎へ向かう列車の中で、私は今回の旅の余韻に浸っていた。最高に天気が良かったラパ・ヌイでの最後の日。今もあの表情で黙って立っているモアイたち。不思議なラノ・ララク。島で見た星空。おいしかったイタリア料理。タヒチアンダンス。思いで深い、空港での別れ。DDAはあのままずっと旅の生活を続けるのだろうか。リンダさんはマルケサスへ行ってみるのだろうか。あの島はこの先どういう姿になるのだろうか…。もっとポリネシアの民族のこと、イースター島のことを詳しく知りたい。今回見られなかった、コハウ・ロンゴ・ロンゴの板も見てみたい。板の本物は、大英博物館とチリのサンチャゴにあるそうだ。そして今回の旅で、南米へ行くにはもっとスペイン語の勉強が必要だと感じた。南米。今、私が世界で一番行って見たいところだ。

だが、またあのエキサイティングなアジアの旅に出たいとも思う。会社へ向かいながら、私の頭の中では既に次のいくつかの旅の計画が始まっていた――。